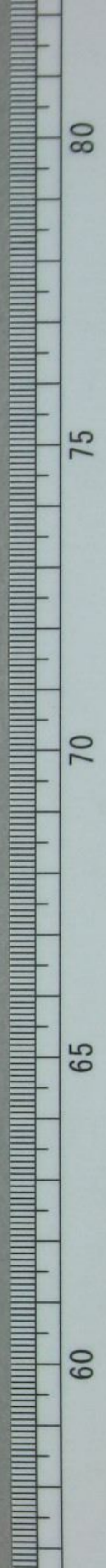


東山十百韻

乾

札正
160

5
1432
1



利
1432
卷

東山十百韻



文政六未三月
獅子見師百回漳大會於海東雙林寺
十百韻興行

二十二日 墨直一會式

たハ靈草備終て梓上ノ裁也

二十三日 十百韻

卯の下刻各着座未紅下刻滿尾

二見形
一文臺五脚

画

京 煙吹
周 文
東 月
雪 水



右文甚祝管共 拙子老師生緣美濃国
山縣の松本を以作之各重書有

式

- 一 諸礼停止
- 一 月卷一句
- 一 出合遠近
- 一 一句一直
- 一 自句三連

一 宗匠文藝瓶草

京一
蘭江

一 諸国文藝瓶草

京三
子琴
茶烟
茶二
壺吹

代巻者三

一 列序七十有四輩

- 一 十四日 森之葉二十七回 各短書切
- 一 樂菴七回

一日日餘興百頁

一客對

こゝ甫三

一坐配

こゝ一榎坊
平市仙唐

一書記

長江詠雙
未笑山

序詞

請越如史記之能浩乃笑言あり 吾朝乃
上吉之佛優の神を也あまされと甘ら名
ありて之を道傳りてありて
吾善古也乃之善よは一知て正風を用闢
一好して世をあまてく普く海内に
流布す然し一に廿の善統

三
柳子老際よりして後 祖の陵墓
を著したるひてより 醜夷の子島乃果
——ぬらひ花思のくもく——またも其の
遺風を慕はまとい場——ものなく世を
規矩といひて了定まらぬいふ道——か
は師世了らばらぬたまたまして世を
一百年の遠長なむく——またも其の
彌ま取越——洛東金出上の書直——に

はくき十百韻のやうに供養——て彼の
大恩を報ひたまふ——九世乃道統
徐風大宗師の志教なりたりと首のきよハ
柳子老師の遺言を負を次て教を
あつに——はつ乃巻ハ死題を信佛の至
我は命——尾のきよハ其師自う難乃
のゆり傳常ハ碩徳を伴ふ追遠に
あつに——はつ乃巻ハ死題を信佛の至

二見形又甚々稀を備ふ柝此又盛衰
みお國山縣お柝より一も 柝子老眼
乃生縁を一の比道より不易の常盤を
させぬふ南陽此は法一も一も一も
志のあれといふ會よりあるとして飛あつた
路より或は官勢のいるをよびていある農
事お同様に考へて千里を遠くせし海あり國ハ
船を結ぶある都と馬をたのむかた

あはれとてけしは法席よりけしなる人
大凡と教ふる人けしは一も一も一も一も
当師の揮毫おとせなるもせん一も一も
尊霊とならふみ一も一も一も一も一も
三師の緯糸をよめおあまの道徳の
いふこと代にお霊魂もよめか護りなす一も一も
る難い事一も一も一も一も一も一も一も
いつか草の心となく柝のうけしすす

盛なりを祝してまつ徳士 藤松葺鳥陰
ら余れり一かきむを多く古稀子餘れ
先毫を添て洛陽の孫意下子

海嶺く頓首百拜して白



遺吟卷

獅子老師

梅さくひくく 蒲陀の彼者哉

おのぬぬ預れ志のそりまき

足なる夢原のり後うやま

備ゆお外考ささりま利

此際乃救もぬき又乾い後

きく勢てまぬえ押ひま

中てあてまの書の朗に

佳風葺

素由

夢遊子

一柳坊

鬼角

白己

凡み通ひも糸伐しは
 新造乃利し細工乃張葛花
 中みも世もさる子のをゆふ
 法のもたしくぬをまぬ宣花少は
 あしき島原水雨
 買えくれ分さうほり時代登
 舟家合字のきり
 係りぬ津波のまゝの海止は
 幽雅
 蘭江
 花亭
 楓斎
 柳眉
 善字
 本隠
 文粧

春釋しよのそぬ摘時
 月美しよのゆかりのそぬ
 くの鴨たうて尾上越は歌
 定免なす南々かとおのりか
 賣とておれく掛りける綿
 靴のをさう流の花れ主婦中
 沈も胸よ者やまやれ舞
 た白さねくまじさん子の雪雀苗
 芝山坊
 文水
 不淨
 卜指
 山花
 蘭室
 仙唐
 月吟

秋登つくろふ尼に新判 公忠
 ささるぬ道に用意の小地灯 其良
 乞小時降くも修めあやう 無石
 おろくは鉄の清あく石高 蒼依
 茶人こそ電あ梅の早咲 二藪
 短日の都に雲ひよとく起て 流危
 悟まよふとすも 疎入地竹 二菊坊
 とやつと一痛落くけとまあり 棠危

白帆とわさる茶なまゝ一 孝投
 舟の徳今人お世も著く 和声
 醉人夢やして端とまゝの 新士
 めくり道月と照しとくんまゝなり 芳洲
 程の希有も異よやむ秋 旨有
 着るを別後の客とて羊 一の洗
 新よよあお眼の上お塔 洞氷
 隆奥れ目威もささるまゝかたて 籠高

改て洞ひ穿て畢り、日 昨旦

忽ち紐もなほのすも 幾川 咏斐

長体之ち一邪産陀て之句 和秀

侍君ハ事ぬ凡の身ハ如也い 甘雪

日とほれなき合款入新 冬柙

滑ぬ名の形頂聖子おの世の養 一化

下多れ掛度もつれくお伽 柳志

赤くす免ハある呂のゆるこ癖 麻蕨

鯛のき思ふ、細く湯 茶煙

うめくちち心の雪れき 概破

たぐせん葩賣します袖乞 湖夕

用^三心のりもしくくれ秋葉留之 碩猶

お国音あはれ延あ霖 兩 白雪

小濡りあて人氣ハ狭くも 高柱

定まる縁ハさ角の悪 葛園

出とゆハ出れのみさき 禮堂 壺吹

子子瞻中一月と色く 彦文

かゝ凍の志ありし物ぬ晴晴下 飲之

大進如の端 烈 呂友

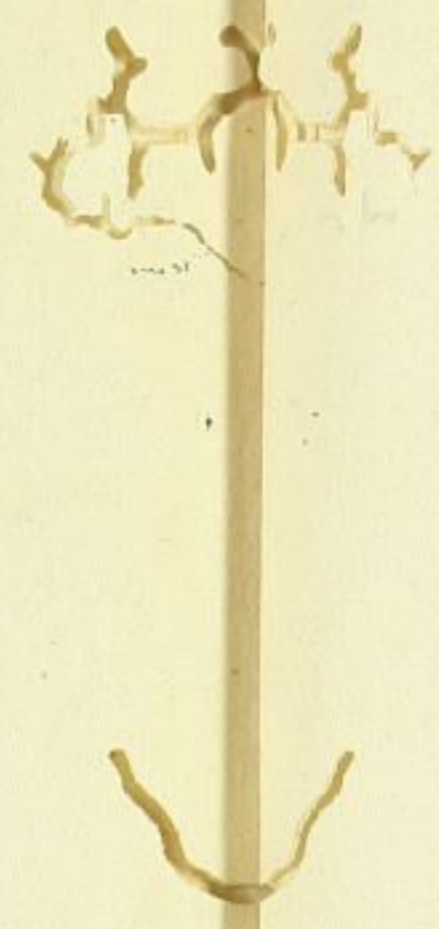
積より老嚴をなす葉 草峰

あは舞 一 国のもり 乍琴

と〜〜〜おあ色き橋如香 左松

流りけりりよ用帳の損 慈荷

潔〜〜ぬ紅葉も侍ふ雨居月 五畝



殿下を改題の新書まよ海 虚堂

ミウ 一 歌く去まも律の音を去て 一 賢

あはかりの風もさわのん 笑山

雲拂く雨よすあき葉もの 杉亭

俗の音も何れを藝の世 一の字

又あはまきあひ婦よあは 甫三

よは〜〜い物鳴心さむ〜 鳴白

藤格ま〜〜楠の梁月〜〜 良邦

福田了負め塩竈乃棟 冬素

中定れ如く男も日私暈 子琴

出逢ふ駒のきめ一目せき 春二

右百負一順

其二花

号極坊

きこや花了ゆむ曉の雲

まゆやふ掛る水浴 其雪

其三鳥

木原

湖を同じくするうや寝るきり

脱置くやまも乾く栞雨晴 碩獅

其四月

楓斎

名月やゆき〜清き葉の中

獲乃草をまきけの聲、虚堂

其五雪

其山坊

二三尺雪城をぬきけ地可申

酒よりあつてきこもあつた 一柳坊

廿六 飯

昨遊坊

大釜乃飯もあつて十夜家

西吹の勢に落葉舞ふ 場 御夕

廿七 茶

栞志

下戸まゝもうらされてあぬ新葉外

閑てまのほくも山 松亭 一の流

廿八 菓

二續

あり乃突やきん二つの春の秋

う海ありて中あ月お友 二菊坊

廿九 香

文粧

くく炬の煙もちりまの雨

煙のしそれあつて山繪まきま 乍琴

三十

雑乃白の向

徐風草

あゝ風乃道貫さへて百年一志

道のかくそみくちりまき 新 子琴

澄き肌吹く音乃初くわ 麻呂

移しつゝ雪をこえきる夕棠 甘山坊

月もろほれとゆめきおし急 吉菜

船きささく走り着たり 文水

中ねしのゆふ一曲お替れく 幽雅

あゝ代の陣よ更あは曇所 冬栲

切草の穂よ春と乃先探と 菊江

早本拾はせし穂てはる美 白己

今れ雪を雪れほらと磨あり 伝彦

駕よお敷のまき 後智 蒼亭

鈴のよ乃とあり乾きをそそり 楓庵

雪も高らてい専乃よまむ 雪亭

あゝぬ富士の麓さへおまの氣 乍琴

あゝ〜〜〜あゝ新涼 二蘭坊

遠きを日色の弱し見送りて 杉亭

寄らざるは海より舟と泊 本原

れりし世を老練の鐘おしき 文雅

飯の小橋乃鏡よりあり 号花坊

案らして花より由りて日の昇 柳眉

人似せしをなほぬ膏の餌 不得

り^ニ如^ニきしは昔のさしむる方襟 乙丸

強よ乃山登るの池 枕破

行意地より平家の下を歩み 吉良

なしくもておし孝行 素由

入以を煮て物より味増醤油 一柳坊

挿は葵も福也き 下指

意ありしはつきの香にあり 二粒

大名れりしはるも遠く花 七花

勤高りしは善徳のすまひ 李投

意をすまひしは 芳洲

増減のせめて目と心貞との 流石

色難へ考へ難す 酒 御夕

二子星と縁を〜とまゝに 宿 宿

柳一の月情まゝと盡さば 願 柳

宮女の帯目まゝ〜と 其雪

下結死〜〜〜 忍心 白雪

物まひ〜〜〜 一 忍心 白雪

夢まひ〜〜〜 一 忍心 白雪

中の子の遊れり 其を甘き心 女 固

供養小僧一 稀れ 千 備 新 士

同じ身のまゝ〜〜〜の七 七 七 有 旨 有

楳もれ 舎り 更を 健〜 自 妻 挂

細塗き〜〜〜れぬ 芳のり 備〜 業 厄

ゆも 定まら 極〜 入る かと 知 巧

おのゝ ちを 伴 西 鐘 あり ち〜 ち〜 芦 夕

ち〜 ち〜 の〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 籠 鳥

洋の国も大和のまゝてむの今 鬼角

麻を踏むや知れ繩をり 昨世方

幾まな男まゝい乃多文と 科考

傳代美りとも和乎乃之神 吟遊

村雨のまゝ乾ぬ枝は中へはあ 飲之

出—蒼より青と 蒼龍 棠家

能く菓子羅ひ果報のまゝと 可学

多れ不思議を誰と家と 一仙

花も花も入るる花も 月峰

早掛舟の根付るる白 洞松

草はる友と枝をとも免れ 柳志

流るる流音 樂成の山 右松

骨折るもまゝに可憐さすくに 良邦

まゝまかひのかり人よ 辰華

月並ぶ音よも盒の踊り 素二

葡萄登ると栗氣のかりる 唐堂

観^ミともあなごにせむ唐の結 一賢
年入くぬ 知のさく村 冬
洗い節時あつたまに 仰^ウ高 出^イ敵
あしかるりて 昔も 明^アあさ 呂^ロ友
人目せく 化粧子 脊子を 結^ムん 一^一可^可洗
恨も ち^チい^いは 妻^メあ^あさ^さ 年^ネ一^一 浪^ナ 鷺^サ白
雪^セ海^ヘ苔^タあ^あか^かる 麻^マ糸^イの 風^フ荒^アて 庫^ク之
因^イ妙^{ミョウ}裏^{ウラ}焚^キく 家^カす^すこ 起^キぬ 家^カ い^いま 活

新^ニき^きて 折^セる^るさ^さを^をか^かさ^さ月^{ツキ} 茶^チ烟^{エン}
酸^サ心^{シン} 賦^フさ^さも^もさ^さを^をく^く 西^セ麻^マ 煙^{エン}吹^フ
西^セ至^シ顔^{ガン}一^一順

表^ヒく 庵^ア主^{シュ} 二十^ニ七^{シチ}回^ヘ津^ツ
徐^コ風^{フウ}序^{シヨ}
く 美^ミや^ヤせ^セひ^ヒめ^メく^くれ^レ 師^シの^ノ心^{シン}
目^メを^を寒^{サム}い^いて^テし^シ 又^{マタ}中^{ナカ}る^ル 月^{ツキ}を^を 冬^{フユ} 柵^{サツ}
二^ニ番^{バン}く^くぬ^ぬ心^{シン}の^ノ美^ミは^ハ 張^テひ^ヒさ^さ 又^{マタ} 柵^{サツ}

解と酒とそら 逸分 幽夜

健れ自慢の暮方の老日士 柳眉

巨艦のか減いきりあけつ 別邦

風さそくきれ夜長の霧もま 一枕坊

傍らても書きあふ川が波 二菊坊

二親の目を一のひぶてお思ひ 夢由

礼日の人よ死あ着よこれ 素二

喉かゝる梅もむらゝよ涙くら 其山坊

まゝ海苔をくし様のまき比 花亭

飯櫃も戻り速をれ送り 膳 多程坊

髪の不吐米をひらり苦よす 葛守

娘百合の暑ふけりし心のは 乍琴

雨こよまぬ一のこまをらる 文雅

柴割木糸へ三里の牛よ鶴 尺坊

竈が歌く火れえ乃念 柳破

臥初も更く糸の巻静まり 楓高

馴——宿坊は鷹はあまの 卜持
まづれても子よあこがく夢思ひ 鬼笛
笛め——のさき旅の香具を 洞ろ
花の陰さ——と今よ魂是く 木浪
百味乃か——の初まき 蘭江

大短考り

雨園葺主十三回忌

伊中書あひまき——と只いれ書

徐風菴

まきとあひれ——入相の——急 仙唐
毛纏——角力取中——と書かれて 白己
其あま系玄白粉——粉 其良
早うてもく——ぬ月の歌合を 可性
なす重き——竈と娘とあ秋 流左
物化すも各々の智慧と書かり 梁厄
竹心柏披日酒乃くちとり 等石

遠くへまの林へ夕陽日 和巧
 是空の中を雀打るよ啼 鶯高
 雪の多うらへ移あむの法 二難
 味ハへてーしあきー茶の飲 旨有
 養くも帰朝の發ぶまのちりて 和秀
 五月よ色さ雨あ掃ー喜 蒼依
 面うーをまれと國まふん給ハと 甘雪
 ふう〜とより泪ま〜ん 永變

篠原の好ハ軍の沙はもりー 李稔
 賣られぬる々席る馬市 菊室
 凡呂燈障まそ今ふ善の月 昨球場
 遊了ハ氏子のうれ踊り連 柳志
 毒^{ニク}忌をさけしる島のまへう 麻嶺
 強^{ニク}新の外よ包むこ由銀 公忠
 咲^{ニク}花のハ重よ七世の恩厚く 新七
 ぢるまぬ美あむうら〜る 一化

右巻終り

いひの大会さうりつものさうりつは
十二回かゝるは甚しき官袴の身乃
自らかゝるは甚しき官袴の身乃

如くはじつこの四は脈の如く 着る

一葉菴主七回禱

徐風奔

日正やほせぬ多乃七巻なり

師の氣まゝ今も湯さ 南三

比すかゝる言解し湯の川もふ 芳州

買ひん木綿賣してり綿 白子

飯替うす女も替りさけりて 露柱

さうりつはく一杯のな 芍薬

みりつはくもきよは子あや色 湖夕

依殿の身おあつれ鳥の巢 塵吹

茶もほもあや色も自と健 芦夕

衣ほけらるゝら致正面 飲之
 曙の斜九らゝさて藤乃書 碩狗
 多靴を〜る 精進 可学
 ち〜から〜目〜心〜心〜心 樵翁
 礼ま致切〜書れ致致 尾松
 去れ〜離の〜書の〜心〜心〜心 暮意
 月清め〜心〜心〜心〜心 一貫
 訪ひ〜る〜人〜と〜致と〜心〜心〜心 今意

清妙と〜心〜心〜心 虚堂
 引細よ〜る〜意を致備つ〜心 杉子
 宵寐を〜心〜心〜心〜心 呂友
 本陣と〜心〜心〜心〜心〜心 五蔵
 可〜心〜心〜心〜心〜心 鶯白
 草の法〜心〜心〜心〜心〜心 子琴
 切〜心〜心〜心〜心〜心 茶壺

右短歌行

餘興

系調

聖とある世に如る情を
汲や露も漏れぬ 友 新七
おとせと人の指をよぶされて 素二
笛よも鳥のしるしのなぐ 山花
家貸してぬらしたるまゝ 橋二
模極深清は小袖は言ふ 心は

秋の空ふしとて ぬきぬきの日 月華

まきぬきよかきぬき 雲 笑山

列産各詠

きりぎりすの泣き声もぬ 柳新 出羽黒山 公意
多し抱を——むき者の柀 雀岡 文三
乙島や美しき門乃 濠 柳眉

越後津川

日の節よんんんん判ん歩ん柳志

まきの橋きりりりりりらら下橋

すんれり聖ん也ん者んのり雨んれり杉亭見付

出代也あら各んあらまり〜ら向ら治り白見

葉のむよき目の布〜小家小盧堂

〜意の首をすりり也帆急舟出雲松出雲松

京と福もあらまり斜をらら交り也

流きよよ〜さらけり鮭の申麻呂か茂

雨ぬ〜子停子ひ〜下の柳の申魚柳致

夕美也鈍〜趣り孕麻升舎

あ書〜前〜拾り汐〜程花亭

書部の解〜了〜かる橋より碩獅

菱咲〜日和よあらぬ夕ア〜多遊坊世

あまのう〜と多り日如南芳州

あれ也札〜通〜梅あら粉吹燗

あら〜は〜ま〜まのまり流春二

長田の舟渡河入る子障のじし 舟木 五畝

多難や柳下流むるれい流 因防柳井

のいひとさあゆ中のきりりれ 文水

維子第や響おきき重母坂 細多

重雀亭下に夜のあるとある 乍

深くの松新す浦の月和る とたらし 柳馬

夢よりあふ奥もあつり候の梅 花白

ぬるりのさひぬまとの糸体 糸 可流

ゆきやうりさり多白と多 はたけ 二彩

積雨く柳好髪を流しきり 井尻 羅赤

川越く菜のむ白り あ 蘭室

らるる 備園 雪

まのぬれ多のり 美作 多枝

流らるる 越中 鬼角

あふり 不 隠

岩崎三里なる 白 李

山川や花の麻の角花
 一賢
 朝家のお室の隣をや海白
 一賢
 膝のや一重つらもの中
 片文
 川よののたれとさほの柳れ
 穂苺
 谷よの馬の隣あやまの雨
 良邦
 る波よの谷戸よの柳れ
 一の学
 鳥の巣や花の序の松一本
 室庵
 谷同よの梅
 欣之

陽をよ田んすの牛の庭くれ花
 秀権
 利を候て序よの梅
 素由
 吾の解や薄もなきしとつ道
 不帰
 柳咲や軒も花のぬ里をれ
 和彦
 うらなよの方の道よの回条うれ
 石松
 茶よの茶よの人のあつくりもせ日
 善子
 雪の意よ一日けつり雪の雨
 二蜀坊
 鳥の鳴よの知の那
 茶畑



其

伊勢東名

うき世もや時よれ陰の紙枕 祈せ

白雲のなうれとなりぬ深き川 白己

押さけてるよ多節の柳 柳夕

吹さく風よきよの二日 煙吹

七段の千里もあふ 柳子の那 月峰

のささるまきくさやふくくさ 女 山毛

はさくしのまきくさよふくくさ 女 山毛

月の夜く新も仲もかすう那 山毛

巻きて〜〜〜二日哉 呂交

むし程の信をりかき梅も家 梅二

京まで馬車より〜〜〜の雪 蘭江

つゆよ吹風となちきり梅れも 伝彦

長田さや梅のまきぬぬら 子琴

西東国ぬらむの彌生う那 甫三

種一ぬ年の踏出は去橋うれ 流石

谷ひらりさくを梅のほく〜〜 筑石

